

くすいばこ



70. 血液中の薬の量を測るときがあるけど、なぜ？

薬は飲んだ後、どのようにして効果を現すのかご存知でしょうか？

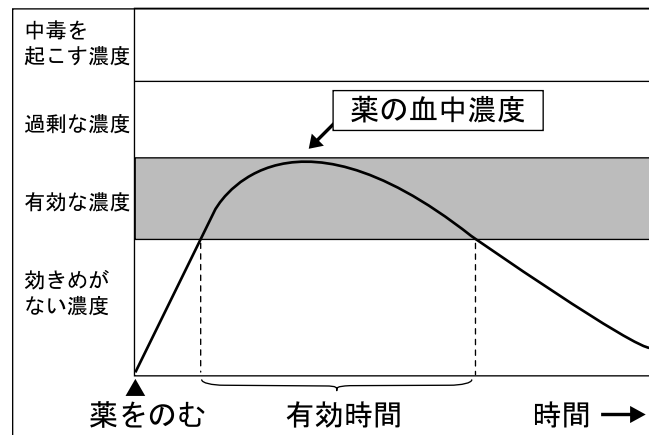
飲んだ薬は、小腸で吸収された後、すぐに肝臓に行きます。肝臓で一部が分解処理され、効果を現さない物質になって体の外に尿や便として出て行きます。処理されなかった一部が血液に入って、効いて欲しいところに運ばれて、効果を現します。ただし、このときにその部分で効果を現すためには、必要な量が運ばれなければなりません。そのため、薬によっては1日に何回か飲まなければいけないこともあります。

薬は効いて欲しいところに必要な量が運ばれなければ効果を発揮しません。そのため、多過ぎても少な過ぎてもいけません。多過ぎると副作用が出る可能性がありますし、少な過ぎると効きません。図で示すように、効果が現れる血液内の薬の量の範囲がそれぞれの薬にはあります。ほとんどの薬はその範囲が広いので、効かないとか副作用がすぐに出るといったことはありません。

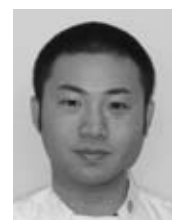
しかし、ある種の薬では効果を現す範囲がとても狭いものがあります。

不整脈の薬や、てんかんの薬、抗菌薬（注射）、抗癌剤などでは効果を現す範囲が狭かったり、副作用の出る範囲が、効果を現す範囲と重なっていたりする薬もあります。そのため、皆さんの血液を調べて、血液中にどれくらい薬が入っているのかを調べる必要があります。

薬の血中濃度の時間による変化



毎日薬を飲んでいらっしゃる方もたくさんいらっしゃると思います。飲み続けることは大変ですし、手間でもあります。しかし、飲み続けていただかなければ、効果を発揮しない場合もあります。効果を得るために必要な薬の量が血液からなくなってしまうからです。血液中の薬の量を測ることは、安全で適切な医療を受けていただくためですので、ご理解、ご協力をお願いします。



(薬剤部 名賀 芳晃)